

<議事録>

第7回「東日本大震災 子ども・学校支援チーム」会議

【取り扱い注意】

日 時：2012年8月19日（日）16:00-18:00

場 所：日本学校心理士会 2012年度大会（中部大学）前日実施

出席者：17名

《敬称略》石隈（会長）・大野（常幹）・藤友（北海道）・藤原（埼玉）・今川（愛知）・小泉（福岡）・西野（宮城）・西山（福岡）・梅宮（福島）・藤岡（京都）・緒方（          ）・岡（広島）・小野瀬（徳島）・小澤（千葉）・瀧野（大阪）・山口（茨城）・都丸（書記）

資 料：資料1～20

※巻末：資料名一覧参照

≪会議概要≫

はじめに

I. 現況報告（被災した県の各支部または被災地支援を行っている支部から）と課題の提起

1. 宮城県（宮城支部：西野先生より）
2. 福島県（福島支部：梅宮先生，こころのサポートチーム：石隈先生より）
3. さくらさぼーと（千葉支部：小澤先生より）
4. 茨城県（茨城支部：山口先生より）

II. 研修報告：欧州学校心理学研修センター主催 学校における危機管理 基礎コース（西山先生より）

1. PREPaRE と ESPECT の比較
2. 本研修会（ESPECT）の概要
3. プログラム
4. BASIC Phについて
5. 危機介入の開始：「ぜい弱性の円」について
6. プログラム中盤以降について～事例を用いた具体的な活動の提示～
7. 研修の報告を受けて

まとめ

≪巻末：資料名一覧≫

## はじめに

開催に当たって、はじめに「第5回子ども・学校支援チーム議事録（2012年3月31日開催）」（巻末：資料1参照）および「第6回子ども・学校支援チーム議事録（2012年6月30日開催）」（巻末：資料2参照）の配布・確認がなされた。司会の石隈先生より、本日の議題（「Ⅰ．現況報告」より現状と課題の提起、「Ⅱ．海外での危機管理研修」）の確認がなされた。

## Ⅰ．現況報告（被災した県の各支部または被災地支援を行っている支部から）と課題の提起

### 1．宮城県（宮城支部：西野先生より）

#### （1）《教師対象》ケア・宮城の活動について

昨年は、ボランティアとして58回の「心のケア研修会」（交通費・謝金なし；対象は教員）を開催した。今年度は、県の教育委員会主催として交通費・謝金をはらわれることとなり、県内各地の事務所の教育課に通知が出された。12月までの予定も含め、約30件の申し込みがあった。

#### ①研修のキーワード1：チーム支援

例）震災がひどかった地域（例；7月28日に東松島市）では…

先生方が気になる子どもの存在

↓  
PTSDのような症状を示す子ども、教室に入れない子ども、学校に行けない子ども  
（背景：震災で親・兄弟・友達を亡くした子ども）

ワークショップとして「チーム援助」を実施。対応策について話し合った。

#### ②研修のキーワード2：PTG

震災という体験を踏まえ、そこにどのような教育的な意味を見出すか？

⇒先生方の認識を高めることが第一

#### （2）《子ども対象》その他の活動について～子どものためのアニメワークショップの支援活動～

※巻末：資料3参照

ケア・宮城との活動とは別に、夏季休業期間中に石巻市役所、女川市の生涯学習課と連携し学童保育において子どもたちへの直接支援（アニメワークショップ）を全15回行った。場所は、高齢者施設のホールを借り、計150人程の子どもたちが参加した。

#### ①子どもたち（+α）の様子

初め：落ち着きがなく、導入の説明を聞けない、喧嘩をするといった行動が見られた

↓

1時間半の表現活動（アニメーションの制作）

（子ども自身の身体活動を2コマ撮影し、それを連続させて動くようにしたもの）

帰りに子どもたちが作成したDVDをプレゼント

↓

子どもに笑顔が見られた。

指導員の人に自主的にお礼をいう場面も見られた

高齢者の方も子どもたちの様子を見て、エネルギーを得た様子だった

#### ②活動の効果

子どもたちにとって自己表現の場になった

自分が主役になって活動ができる⇒喜びへ

☆子どもたちにとっては、身体を使ったワークショップが有効である

【課題】費用がかかる点（今後も、冬期休業中や春季休業中に実施することを予定しているが、そのための費用を工面する必要がある）。

### （3）ISSBD（International Society for the Study of Behavioral Development）参加報告

7月上旬に Canada で開催された ISSBD で震災関連の 2 つの発表・報告（幼児の反応および心理社会的支援が必要な状況にあることについて）を行ってきた。

### （4）その他

昨年夏 WHO が出版した「現場支援者のための PFA」の著者であるスナイダーさんらをお招きして 10 月 18 日に講演及びワークショップを行う予定である。「現場支援者のための PFA」の翻訳出版に当たっては、連携している Plan Japan が費用を出し、翻訳にはケア・宮城が深くかかわっている。その短縮版を一万部出版。欲しい人には配布が可能である。資料ができ次第、メーリングリストで配信したい。

### （5）宮城支部の報告を受けて

#### 【石隈先生】

アニメワークショップ開催に当たっての費用は、昨年夏に教育心理学会から寄付された 50 万円を使用している。身体を使う点、また自分を画面で見られることで調整が可能となりコントロール感が高まる点がとても良いと思う。

#### 【西野先生】

情緒不安定な子どもがだんだんと取り組みに夢中になっていく様子が見られた。

#### 【石隈先生】

学童保育の場で行われたということは、その中には親を亡くした子どももいるか？

#### 【西野先生】

湊小学校に行った時、自宅が半壊した子ども、全壊した子ども、親を亡くした子どもがいた。その子たちは初めは喧嘩ばかりして指示が聞けず、落ち着かない様子だった。また、石巻市では仮設またはみなし仮設に入っている子どもたちが多く参加し、そこも初めはざわついていて。一方、山沿いの地区の子どもたちは、少人数であった点も考慮しなければならないが、対照的に落ち着いていた。

なお、子どもたちに感想の記載を求めたが、小学校 3 年生以下であったために気持ちを言葉で書き表すことは難しかったようである。ただ、活動の様子をビデオ撮影しているので、そこで子どもたちの様子が変わっていく過程が分かるのではないか。

#### 【小澤先生】

費用に関して。日本財団は、書類の提出のみで 100 万円出してくれる（HP 参照）。赤い羽根においても義捐金とは別に 30～40 億のボランティアサポート金を有しており、今後そちらを活用する方法もある。お金でまかなえるところはまかない、自分たちのエネルギーは子どもたちへ注ぐというのがさくらサポートの方針だった。書類の作成は大変だけれども、そのような基金を多めに利用すべきである。他にも、文部科学省から「スクールカウンセラー等派遣事業」に係る費用が提示されている。

#### 【西野先生】

スタッフは大学生やアニメーションを専門に学んでいる人たちであったが、その方々への謝金は微々たるものであり、大学関連の宿泊施設を利用したり、お弁当をこちらで作って行ったりした。ところで、子どもたちにとっては、「お兄さん、お姉さん」である大学生の存在が嬉しかったようだ。

なお、文部科学省の活動に関しては、以前管理職の先生にインタビューした際「文部科学省あるいは県の教育委員会は SC を色々な所から派遣するけれども、本当に必要な所には相談室がない」という意見が得られた。受け入れ先のことを考え、効果的な配置を考えて欲しいとのことである。

#### 【小澤先生】

先の「スクールカウンセラー等派遣事業」への申し込みにおいては、SC で無くても良い。「等」ということなのでさくらサポートも該当した。

#### 【石隈先生】

子どもの感想文にとっても関心を持っている。PTG の観点からも、今後結果を整理し報告して欲しい。

## 2. 福島県（福島支部：梅宮先生、こころのサポートチーム：石隈先生より）

初めに、震災時に校舎が全壊した福島学院大学が、梅宮先生のご尽力も加わり、この度無事に再建されたことが報告された。これら業務のために急性期の現場への関わりはできなかったが、今後関わっていきたいと思う旨の発言がなされた（特に、大学で大きなホールを建設したので、そこで研修会を行っていききたい）。

### （1）福島の現状について

福島県は核汚染の問題を抱えており、それは今なお進行中である。したがって、他の県とは異なり、「特殊な状況」にいると見なせる。福島県の沿岸地域では、放射線汚染の問題のために未だに遺体の回収にさえ入れない状況である（しかし、徐々に警戒区域も狭まってはいる）。今後、被災地支援に関しては、「福島モデル」を作っていく必要があるだろう。

#### ①子どもに対する支援について

西野先生の発表を踏まえ、現実的に「何かを作る」という活動が子どもたちには必要であると感じた。今後、このことを踏まえた試みについて考えていきたい。

#### ②先生方への支援について

バーンアウトの問題が大きい。先生方に対しては、ピア・サポートのような事を考えている。ピア・サポートに関しては同業者である教員の立場として話を聞くことのできる学校心理士の存在が大きい。

なお、被害を受けた先生方のみならず、被害を受けた地域の子どもたちと関わる先生方の負担が甚大だと聞いている。この点が、今後対応すべきポイントとなっていくだろう。

### （2）課題：子どもたちへの進学支援について

学校心理士かつスクールソーシャルワーカーの先生方が、避難所の段階から進学支援・指導を行っている。現在、その活動が徐々に実を結ぶようになってきていると感じている。福島県は震災後学力が落ちたが、現在徐々に回復していると聞いている。

### （3）石隈先生より：報告～子どもたちのこころのサポートチーム～

昨年立ちあげられた、「子どものこころのケア支援会議」（福島県教育委員会主催）が「子どものこころのサポートチーム」に名称を変更した。構成は、地元の SC, SSW, 小学校・中学校の校長会の代表、日本心理士会会長（石隈先生）である。そこでは、福島県の子どもの施策について話し合われている。そこでの活動と福島県のいくつかの学校を訪問して、以下の事を感じた。

#### ①不安に対する対処の格差について

ある学校でのプール活動の際、28～30名中、25、26名はプールに入るが2、3名は入らない。学校はプールを除染済であり、放射線の値も定期的に親に伝え、安心感を一定に保つ努力をしているが、

やはり不安の高い子どもまたは親がいる。そのような子どもを含んだ学級の先生方は、その子たちが嫌な思いをしないような学級経営について一生懸命考えていた。このことは、課題となっている。

また、いわき市では放射線の問題でいったん地元を離れた家族が仕事の問題でまた戻ってくる現象（リターニー）が見られる。いったん地元を離れた人たちと、地元を離れずにやってきた人たちとの間で生じている問題がある。これもまた課題となっている。

### ②施策について～検討されている点～

福島県では、子どもたちの教育が福島県の基盤であるという信念のもと、道徳教育やサイコエディケーションにも力を注いでいる。SC や SSW が中心となっており、この点も長期的課題として施策を検討している。

また、福島県の全小学校・中学校を対象に、9月に心の健康調査の実施を予定している（サポートチームに入っている浜松医科大学の辻井先生が持っている心理的な健康調査を基盤として活用）。実施後、結果は11月の3者面談、保護者面談、本人面談時に返す予定である。個票で心理的な安定度、元気の度合いを示し、資料として活用することを目指している。費用に関しては、浜松医科大学のチームが国から2000万円の援助を受け、個票の作成をすべて請け負うことになっている（来年以降については懸念事項ではある）。ただし、調査ではプラスαとして、子どもたちに「震災後に自分で工夫してきたこと、大変な中自分なりにやれてきたこと（ちっちゃな一歩、ちっちゃな前進）」を最後に自由記述として、一言書き加えてもらうような設問を設けることを提案した。この提案は受け入れられ、組み込まれることとなった。この部分の分析は、科研のメンバーと共に石隈先生が引き受ける予定である（ただし、打ち込みは浜松医科大学のメンバーが行う）。

### ③さいごに

福島県は放射線の問題を抱えているため、他の県に比べて対応はこれからである。教育においては、学力や生徒指導がより重要になってきていると思う。

## (4) 福島県の報告をうけて

### 【瀧野先生】

質問紙の中には、放射能についての設問も入っているか？

### 【石隈先生】

放射能に関する項目は含まれていない。賛否両論であった。「放射能に関する項目も入れ、事態をきちんと把握すべき」という意見が出た一方、福島県（調査する側）も未だ放射能という事態をどのように扱ったらよいか戸惑っている。例えば、「放射線が怖くて外に出ることが不安である」については茨城県とも重複する事態であり、この項目は入れた方がいいのではないかという意見も出た。しかし、福島県の先生方からは「その項目はまだ入れない方がよい」という意見が強かった。

### 【瀧野先生】

放射能の問題は大きいと考えている。いつきくか…。

### 【西野先生】

子どもに対して質問するということだが、子どもに聞いて大丈夫なのか？

### 【石隈先生】

どのくらい不安なのか、子ども自身がどう感じているのかをきちんと理解した方がいいという意見だった。

### 【瀧野先生】

浜松医大の先生が「入れない方がいい」という意見だったと聞いている。

【西野先生】

まだ、影響については真実がわかっていないのでは？

【瀧野先生】

身体的な影響ではなく、心理的な影響が問題。本当は避けて通れないことであり、先生方が実態をつかみながら対応しなければいけない。ただ、調査をしなくても実際に子どもと接していたり話をしていればわかるという意見もある。それはそうかもしれないが…。

【石隈先生】

「回避と直面化」という観点からは、時期的にはそろそろ子どもたちに尋ねることに意味があると瀧野先生は考えていらっしゃる。確かに、大規模調査でもあり、現状把握という点からは大きなチャンスではあった。しかし、現地の先生方の抵抗感が非常に大きかった。教育委員会の義務教育課が主体であったため、やはり外部専門家の我々の意見よりは現地の先生方の意見を尊重することになったのだろう。

【西野先生】

米沢市在住の共同研究者の先生から、幼児のひきこもりについて話を聞いたことがある。気持ち的に落ち込んでいるご家族も中にはいる。その先生に、「表現する機会」となるであろう活動を紹介した。

【石隈先生】

身体を動かすことに関し、最近福島県では放課後 3 時間は外に出ても大丈夫ということになったと聞いている。

【〇〇先生】

「不安」を聞いて出てくる結果が政治的に利用されるのではないかという危惧が大人側にあるのではないか？大人社会の不安。

【瀧野先生】

最終的には、その結果を受けて学校の先生が対応しなければいけないということになる。すると、なかなかその責任がとりにくいという側面もあるのだろう。

【石隈先生】

結果が個票として挙がり、保護者や本人に示さなければいけないため、その心の準備が先生方にできていないということもあるのかもしれない。先生方も放射能に対する不安が強く、また保護者も強い。その様な保護者とどう付き合っていくのかもまた、先生方にとって課題である。

【西野先生】

放射能の影響についての正確な情報がわからない。わかってないなど、どんな対応ができるのかこちらにもわからない。

【石隈先生】

我々も勉強しなければならない。

【藤友先生】

福島大学から京都教育大学に編入した学生がおり、その学生を中心に福島へのプロジェクトを立ちあげている。今日か昨日、浜通りの相馬高校の演劇部の子どもたちを招いて現地からの報告をしてもらった。大学が共催として、公的施設を借り上げた。そこでは、「関西の人達は私たちの事を全然考えおらず、原発を動かせと堂々と言っている人がいる」と指摘していたが。このように、現地の子ども

たちが身体表現で自分たちの事を発信する活動も重要であると考えている。

#### 【梅宮先生】

福島に住んでいる人間として、「除染をしなければならない」ということが声高に言われている。しかし、放射線だらけなので、実際にどうやっていいのかがわからない。高速洗浄機で洗えばよいと言われているが、洗った洗浄液はどこに行くのか？また、コンクリートなどは洗浄では足りず、表面を1～2センチ削らなければ意味がない。やはり、削った物はどこに捨てればいいのか？したがって、「除染をしなければならない、除染をすればよい」というのは福島県外からの意見。福島県内では、放射線の怖さはわかっているが、現実問題としてそこで生活をしなければならない。解消できない不安が絶えずある状態で生きているのが福島県である。若い女の子たちからは、「私たちはもう東京の男の人とは結婚できない。私たちは壊れている」という言葉が普通に出る。こういった中で、「除染」にのみ終始している国の政策は、はたして福島県民の不安を解消する取り組みと言えるのだろうか？なお、飯館村ではモニタリングポストの周辺を綺麗に除染し数値を下げているという噂が流れている。このうわさが流れること自体が、不安の根深さを示しているといえる。「覚悟を決めて福島県で生きていく」といった時、その「覚悟」の根拠がないのが現状である。今後、「覚悟」の根拠を教育で引き受けていくことになるのかもしれない。我々は先生方をどのようにサポートできるだろうか？

### 3. さくらさぽーと（千葉支部：小澤先生より）

※巻末：資料4参照

#### （1）さくらサポート～昨年の振り返り～

##### ①活動

- ・全4期の活動：第1期（4.4～4.27；第1回～4回）、第2期（5.9～7.27；第5回～第16回）、第3期（8.22～12.21；第17回～34回）、第4期（1.9～3.23；第35回～44回）
- ・延べ132日間
- ・45名のスタッフ：教員OB+現職教師+千葉大生

##### ②内容

- ・教育支援（遊びの支援、学習の支援：「よく遊び、よく学べ！」）
- ・教育相談支援（心理教育、全体の生徒に「心の健康調査」⇒要請を受けて動くスタンスで）
  - 心の健康調査＝阪神大震災時に使用された「自分の心の知ろうテスト」（24項目）  
読み原稿が3～4頁  
2011年6月、11月に実施。  
できるだけ早く（翌日）に結果を返すことを心がけた。
  - 取り出し面接＝小学生であることから「天使の粘土」を使用しながら（表現活動）
  - 校内研修＝先生方を対象に実施。「よく遊びよく学べ」の大切さを強調。
- ・一般支援（物資の仕分け、仮設住宅に移るお手伝い、仮設住宅訪問：子どもたちを支援する上で家庭と地域への支援は欠かせない）

#### （2）さくらサポート～今年度の活動～

- 【1回目】学校からの要請を受け、3回目となる「心の健康調査」を5月末に実施
- 【2回目】6月第1週に取り出し面接
- 【3回目】7月1、2日：石巻市での研修の帰り道に訪問

【4回目】9月15日：運動会（「支援」というよりも「訪問」）

### （3）ストレスチェックについて

#### ①結果（※参照：資料4左側下段のppt）

- ・赤が女兒，青が男児
- ・「不安」（上段左），「うつ」（上段右），「混乱」（下段左）
- ・阪神大震災時は，2カ月後，6か月後，1年後に実施  
⇒結果：2回目は数値が急激に下がり，1年後には横ばいまたはやや上昇。記念日反応か。  
⇒比較：阪神の際の数値よりもやや高い
  - 2回目の数値が下がっていない（横ばい又はやや上昇）
  - 3回目の実施においても，有意差が出ないほど数値に変動が少ない

#### ②今後

さくらサポートとしては，継続実施は考えていない

⇒理由：厚生労働省のプロジェクトの元，千葉県にある国府台病院が被災県に対して長期的（今後4年間）にストレスチェックの実施かつ医師の派遣を計画している。石巻市はこのプロジェクトを全面的に受け入れた。そこで使用されているストレスチェックの出典がさくらサポートで使用しているものと同じであったため，重複を避け実施を行わないこととした。

#### ③その他～先生方とのプライベートな場での食事会～

今年度第3回目の訪問時，キーパーソン担ってくれた養護の先生を中心に，教頭先生，教務の先生を始め，有志の先生方と食事会をした。プライベートな場で話したのは，この時が初めてだった。

《話の中で，震災当時の話が初めて出てきた…想像以上に過酷な状況》

- \*3日間飲まず食わずだったこと
- \*学校の裏にあったかまぼこ工場がかまぼこを提供してくれ，男の先生がもらいにいったこと
- \*もらいに行く途中で，墓石の上にあった赤い帽子の女性のご遺体を目にした。そのご遺体は，長い間片付けられなかったこと
- \*「子どもたちも，そのご遺体を目にしているのではないか…」

《現在の学校の様子：新しい校長先生》

- \*昨年度3月で校長先生が定年され，今年度は新しい校長先生
- \*女川町（町が全て流され，多くの犠牲者が出た町）から来た校長先生
- \*校長先生は，児童や保護者のご遺体が発見されるたびに，確認に行った
- \*女川町は震災後4日後（3月15日）から学校を再開した。女川町の教育長の先生の方針。一方，さくらサポートが支援に入った石巻市の港小学校が再開したのは，5月9日であった。
- \*再開に当たって：被災の程度が酷かった子どもたち⇒始業式前に集められ，先生から話  
「あなたたちを守っていくからね」

\*校長先生は定年まで残り2年⇒被災の大きかった地区に異動を希望

《現在の学校の様子：子どもたちの状況》

- \*中学校への間借り生活は再来年まで継続。放課後も業間もない学校生活。
- \*空いている教室をとびとびで間借り⇒2階のワンフロアすべてを小学校で間借りできることに
- \*プールは全員入った。そのために，先生方から非常に決めの細かい指導がなされた。
- \*今後課題となってくるのは学習支援であろう。

※先日の学力テストの結果、宮城県はそれほど学力が低下していないという結果であった。その背景には、先生方の多大なる努力があるだろう。ただし、PTG というよりはむしろランナーズハイの傾向があるのではないかと小澤先生としては危惧している。

#### (4) さくらさぼ一との報告をうけて

【西野先生】

地域が「再建しよう」という気持ちを持っている被災学校に対しては、津波の被害を直接受けている1階部分を板張りにするなど、それなりに手が入っている。しかし、再建の方向にない被災した学校では、校舎が野ざらしにされたまま放置され、荒廃が進んでいる。

### 4. 茨城県（茨城支部：山口先生より）

#### (1) 学校（特に県北）の現状

##### ①統廃合の加速化について

昨年は県全体で人口が最大の減少幅であったが、特に県北では、子どもたちの数が減り、学校の統廃合が進んでいる。特に、東海村と神栖では顕著である。震災以前は10年計画くらいで統廃合が進められていく計画であったが、被災により校舎が使用できなくなった学校が出たことで、急速に統廃合が進むこととなった。

地震による二次的な事態である統廃合の結果、現場では以下のような混乱が生じている。

\*「発達障害の子どもたちが落ち着かなくなった」（養護の先生より）

\*統廃合によって急に他の学校の先生と一緒に became ため、先生自身が落ち着かない

##### ②放射能の影響について

特に、つくば市、取手市、守谷市で放射能の値が高く、問題となっている。ある小学校では、数年前に校庭を芝生化した。その結果、今回の放射能被害ですっかり汚染されてしまい、手入れも除染も進められていない状況である。そもそも、除染ではがした芝生はどこに捨てれば良いのか？

#### (2) 小学校へのSC配置

文部科学省から予算がつき、急に5月から全小学校にSCが配置されることになった。学校の状況に関係なく、事務的にすべての学校にSCが派遣された。効率の良い予算の使い方とはいえない。

#### (3) 研修実施報告

福島県と山形県の教育センターでチーム援助についての研修を行った。そこで、冊子（『震災に関する子どもや学校のサポート』）を配布した。神栖市や鹿島市といった市町村単位でも、チーム援助についての講演会を設けた。

#### (4) 茨城支部の報告を受けて～放射線の問題と転校生について～

【石隈先生】

次の日の天候を受けて、放射線が高い（ホットスポット）・弱いといった地域が出てきている

【梅宮先生】

次の日にセシウムが気化している。セシウムは風に乗って2方向に分かれ、一方は風によってつくば市の方に流れた。その後、風は福島県方面に流れ、白河市、郡山市、福島市あたりで雪に吸着して落ちた。もう一方は、原発から福島県の谷沿いに流れた。

【山口先生】

福島県の放射線の値を毎日見ているが、大体0.6～0.7マイクロシーベルトである。この値を基に計算

すると、2 ミリシーベルトを超える（屋外にいる時間を1日10時間とし、1年間365日で計算）。この値は、文科省が年間に浴びる放射線量として制限している1 ミリシーベルトの2倍である。

#### 【梅宮先生】

自宅の側溝は0.3 マイクロシーベルト。福島市で非常に高い数値を示す講演は、0.4 マイクロシーベルト。子どもにとってとんでもない環境である。

#### 【石隈先生】

つくば市は、被災後福島県から多くの転入生を受け入れた。初めはホテルを仮住まいとしていたが、現在では公務員宿舎へと転居し、子どもたちはようやく落ち着いてきている。ただ、転校生は増えているが、一方でつくば市全体としては、転居者も多い。

また、以前山形県に講演に訪れた際、やはり発達障害の子どもに関する話が先生方から出ていた。その中で、先生方は「発達障害の子どもが3割くらいいる」という。これは間違いである。元々発達障害であったお子さんが転校によって益々落ち着かなくなった場合、発達障害ではないけれど震災後の様々なストレスによって不安定になっている場合、震災を機に家庭で生じた問題が背景にある場合など、いくつかの要因が重なって落ち着かなくなっているケースがあるのではないかと考えている。

## II. 研修報告：欧州学校心理学研修センター主催 学校における危機管理 基礎コース（西山先生より）

※巻末：資料5参照

Crisis Management for Schools は EU の補助を受け、学校における危機に対する対応力を高めることを目的に立ちあげられた研修プログラムである。当初1種類のコースで開始されたが、現在欠く5日間の基礎コース・上級コースを設定し、基礎コース終了後2年の実務経験を経て上級コースが受講できる。ISPA に所属する学校心理士養成経験のある者による、実践的ニーズに即した研修である。

### 1. PREPaRE と ESPECT の比較（※巻末：資料5の1頁参照）

#### (1) PREPaRE

学校関係者に向けて、学校組織内に聞きに対する「予防」「準備」「対応」「回復援助」をどのように遂行するかに関して理解したあと、自校の研修を行う

⇒NASP が母体。トレーナーとして、段階的に力を身につけていく研修の構成である。

⇒ツール、チェックリスト、学校のレイアウト等、枠組みやストラテジー等の客観的な情報が中心。

#### (2) ESPECT

学校組織内で、危機発生後に学校心理士を専門性の中心とした支援チームが、どのように介入し、対応を援助し、回復を支えるかを学び実践力を高める研修を行う

⇒ISPA が母体。ヨーロッパでは、ここ10年ぐらいの間に大きな事件や危機対応が困難なケースが発生している。そこで、EU が大きな予算を付けた。具体的には、EU 諸国の中に限定した形で、20～30人くらいの参加者が集まり次第、危機対応の経験のある講師がそこに赴き本研修会を開催する。危機介入時に当該学校で学校心理士を中心とした専門家のチームがどのように対応したらいいのかについて実践力をつける研修構成である。現時点で、5年ほどの実績がある。

⇒援助者となっている「自分」が、学校内でどういう風に動くべきかという視点を中心。具体的には、学校の中で心理援助をする人（SC、スクールサイコロジスト等）や学校外から入ってきた心理援助をする人（学校心理士）が管理職をどのようにサポートするかに関しての視点。それら心

理援助を行う人が本研修会に参加している。なお、参加者は本研修会経験者、つまり自身の成長モデルとなるような人が身近にいるようであった。

## 2. 本研修会 (ESPECT) の概要

日程：2012年5月12～18日（7日間）

場所：ルクセンブルグ公国 ノートルダム会修道院「マザーハウス」

内容：学校が関係する危機場面において、主にヨーロッパで活動するスクールサイコロジストらが、他の専門家（学校管理職・教員等）と連携し、危機管理のために実態把握・介入・調整等ができるよう、力量を向上させることを目指す

※今回は「基礎編（1週間の研修）」。さらに本研修受講後2年間の臨床経験を経た人の未、「アドバンス」の受講が可能となる。

対象：危機対応を求められる学校におけるメンタルヘルスを支援する専門家

（一般参加は現時点では行っておらず、EUや学区等の団体契約の上、個人で申請する）

形式：講義＋ロールプレイ＋ケーススタディ

## 3. プログラム

- 1) BASIC-Ph（危機経験。BASIC-Phによるコーピングの理論的理解）
- 2) 死と死別（死別の個人的体験と自他の対処法略・専門的介入経験）
- 3) 危機介入の開始（危機介入における役割、傷つきやすい人の把握と支援）
- 4) NOVAによるGCI（NOVA；全米被害者支援組織を用いた集団危機介入）
- 5) GCIの運用（Group Crisis Interventionの紹介と小グループでの実践）
- 6) メディア対応（危機におけるメディアとの関わり）
- 7) 危機の翌日（危機介入の初日にすべきこと）
- 8) 対応チームの構成（学校危機の介入への教職員の力量向上とチーム作り）
- 9) PFA ツール理解（心の救急箱；Psychological First Ade と対処方針のポイント）
- 10) 大規模危機介入（模擬ケースにおけるグループでの対処シュミレーション）
- 11) セルフケア（危機介入時における支援者自身の状態の把握とケア）
- 12) 振り返りと評価（実践現場の支援に活かす学びの発表とプログラム評価）

⇒【ESPECTの軸：BASIC-Ph, PFA, 脆弱さに対する円環的な理解の枠組み】

※「自殺」は特異的・個別的であるため、「アドバンス編」で扱われる

※各項目の時間配分については、資料5を参照

## 4. BASIC Phについて

### (1) 背景

危機の捉え方は個々人で様々

⇒コーピング…様々なコーピングのタイプの取り合わせが個々人によって異なる

### (2) 目標

物事の見方の転換を目指す

⇒「上手く行かない理由」から「どう困難を乗り越えるか」へ

「病理的視点」よりも、「回復力」への注目と賞賛的アプローチの重視

### (3) 前提

人のサバイバルの奇跡

⇒人は最も傷つきやすい存在。同時に、いかなる状況にあっても唯一生き残ることができる存在  
⇒「回復力」に着目することで…

- ┌ 個人・グループ・コミュニティが困難を乗り越え、疾病を抱えることを最小限にする
- └ 回復の過程を促進する手掛かりを得ることができる

※注意：「回復力」＝×新しい概念 ○これまでの知見を統合した概念

### (4) 根拠

《政治的暴動を経験した子どもたち》

自分の親のイデオロギーを理解している子ほどストレス症状が低い

《身体障害者》

コーピングとしての楽観性の獲得←情緒的・身体的困難へのコーピングに有用

《戦乱下の子どもたち》

ローカス・オブ・コントロールやセルフ・コントロールの能力は、ショックを軽減

### (5) 考え方

「自分 (me) と世界 (World) の間の接点にあるものをどうとらえるか？」⇒BASIC-Ph の領域

- ┌ M E : 忘れられた交流手段
- └ World : 隣接した交流手段

### (6) 理論：統合モデルとしての BASIC Ph

- B ⇒①BELIEF (Self value…自己・価値)
- A ⇒②AFFECT (Emotion…感情・情動)
- S ⇒③SOCIAL (Role Others/organization…役割・友人)
- I ⇒④IMAGINATION (Intuition Humor…直観・創造力)
- C ⇒⑤COGNITION (Reality Knowledge…論理性・知識)
- Ph⇒⑥PHYSICAL (Action Practical…身体・活動)

#### ①BELIEF

【信念・価値・希望・自尊感情・意味・宗教】

\* 関連理論：Frankl, Maslow

#### ②AFFECT

【関わりを持つ、他者の感情を共有する】

\* 関連理論：Freud, Rogers

#### ③SOCIAL

【社会的視点】

\* 関連理論：Ericson, Adler

\* 関連する研究例

- ・ 家族システムの機能は好ましくない環境下での子どもの暴力的な行動の発生への緩衝材となる
- ・ 社会的コミュニケーションと援助的な仲間はコーピング行動を支える
- ・ 社会的な人気、年下のきょうだいや病気の親に対する責任ある関わり、他者支援は、子どもの

能力や回復力への感覚を促進する

#### ④MAGINATION (Intuition humor)

【創造力を用いた対処】

\* 関連理論：Jung, De Bono

\* 関連する研究例

- ・性的虐待に関し、空想は回復力として機能する
- ・救助隊員は映画俳優のような気分を持つ
- ・子どもは否認することによって、困難な状況に対処する

#### ⑤COGNITION (Reality knowledge)

【認知的・現実的側面】

\* 関連理論：Beck, Ellis

\* 関連する研究例

- ・明確な指示は、不安と無力感の軽減に役立つ
- ・活発なコーピングは「活動的」、「問題解決的」、「楽観的」であることと関連
- ・認知的評価と子どものコーピング能力は相互促進的（イラン・イラク戦争より得られた知見）
- ・学んだことの想起と自己指導の手順の繰り返しは、コーピングに有用（救助隊員の報告より）

#### ⑥PHYSICAL

【生理的・感覚的・活動的側面】

\* 関連理論：Pavlov, Watson

\* 関連する研究例

- ・活動的に多忙であることが、自己の事を考えないですむのに役立つ
- ・積極的に関わるか、事後対応するかで差が出る
- ・演習、練習といった準備をしておくことは、コーピングの力を高める

《研修時に行ったワーク》

“(2人組みになり) Aさんは最近行ったよかったことを、1分以内で述べて下さい。

Bさんはそれをそのまま書き取って下さい”

↓

書き取った内容を「BASIC-Ph」の枠組みで分析し、該当する部分をチェックする

↓

「BASIC-Ph」それぞれに該当する箇所を数え、その人独自のコーピングの特徴について検討

#### (7) まとめ

- \* 人は様々なコーピング資源を有している
- \* すべての人には独自のコーピング方法がある
- \* 危機状態時には、その人独自のコーピング方法を用いるべき
- \* 支援者はそのコーピング方法がなんであるかを把握する方法を学ぶことが可能
- \* 支援者は初期介入時の訓練で、コーピング資源を蓄積できる

## 5. 危機介入の開始：「ぜい弱性の円」について

BASIC-Ph 後のプログラム

《3種類の円》

①問題との実質的・物理的距離，②問題との心理・社会的な距離，③リスクの抱えやすさ

## 6. プログラム中盤以降について～事例を用いた具体的な活動の提示～

### (1) 中盤：事例の提示

「学校の放課後のスポーツ行事として対外的な試合を行った。その帰りに事故に遭った。その結果、事故の翌日に1人の子どもも死亡し、1人が大けがで入院。翌朝あなたは教育事務所から当該学校に派遣された。あなたは今管理職を前に座っている。以上の状況を踏まえ、さあ、あなたは何をする？」

↓

{ 留意点とは何か？  
{ どのようなことに困るだろうか？

例) 職員についての説明：校長先生から説明が可能か？もしも難しそうな状況だったら？

⇒もしもあなたが説明を行うにしても、前提として校長先生と話し合い、許可を得る必要があるだろう。

(※この点に関しては、米国だったら機械的に役割が振り分けられる部分かもしれない)

例) 【チームで取り組む視点】

大けがをした子どもの担任の先生，死亡した子どもの担任の先生，その子どもたちが属する学年の主任の先生，当該学校のカウンセラーへの聞き取りの仕方は，どうしたらよいか？

⇒1人は記録，1人は進行役として，まず講師がデモンストレーションを行った。

その後，研修参加者はそれぞれ役割を割り当てられ，40分ほど各自デモンストレーション。

⇒1対1の取り組みから始まり，段階的に集団を対象とした取り組みについて学んでいく

### (2) 後半

例) 危機的な状況を体験することにより，我々はそこから何を学ぶのか？

⇒危機対応を経験した当事者の先生方の意見を集めたものを読み，皆で経験知（プラスαの学び）を共有。

例) 【メディア対応】

⇒ディスカッションを通じ，メディア対応の原則やコツ等について学ぶ。

## 7. 研修の報告を受けて

【石隈先生】

米国の研修はシステムについて学ぶ視点。今回の研修報告からは，各介入者に応じた援助を学ぶという点で参考になった。

【西山先生】

研修時の話し合いの中で，日本の状況について質問がなされた。特に，「福島はどうなったか？」といったものが多かった。「日本」というよりも「福島」への関心が高いように感じた。

【石隈先生】

今回の報告を基に，さらに言葉を足してまとめて欲しい。

【山口先生】

「The BASIC-Ph multi model approach」部分の ppt に記載されている「支援者は初期介入時の訓練でコーピング資源を蓄積できる」とは具体的にどういうことなのか？

【西山先生】

コーピングは個別に独特なため、例えば、現実的・データの捉える癖が無い人や普段感情を捉えることを見落としがちなコーピングの特徴を持っている人であっても、初期介入時に、コーピング資源を多角的に捉えようと丁寧に情報を集めることで、自分のコーピングの偏りに関わらず資源を見出すことが可能となる。それはあらかじめ訓練によって可能となる。

【西野先生】

これは、具体的にどういった人たちが対象となるのか？

【西山先生】

研修参加者は、ある程度の心理学的な知識と学校文化に関する知識を持ち合わせていた。日本で言うところの学校心理士、スクールカウンセラー。学校の中では対象は限定され、むしろ市の単位で学校の中での危機対応をマネジメントできるコンサルタントレベルの人が対象となる。

【梅宮先生】

例えば、我々が CI と関わる際には、こちら側の得意な方略で関わる。しかし、ここで扱っているのはむしろ、CI のコーピングを見抜き、それに合わせて最も良い選択肢を提示する、ということか。すると、こちら側は多様な選択肢を有していなければいけないということになる。

【西山先生】

この研修では、まず支援者となるお知ら側の癖をきちんと把握することから始める。そのことを踏まえ、支援する側にもコーピングの癖があることを学ぶ。

【石隈先生】

初期の介入の仕方を学びながら、こちら側も自分の「バッグ」が大きくなる。その中から、相手に合うものを選択していこうということなのだろう。米国においては、教育のリーダーや大学の先生、スクールサイコロジストや SC のベテランといったイメージであろう。

【今川先生】

(※ワークの手順の確認) ワークを通して、自分をアセスメントし、コーピングの偏りを知る。

【西山先生】

ワークにおいては、相手が言ったことを書き取る側はそのまま書き取ることがポイントである。実は、聞きとる側も自分が聞き取りやすいようにきいていたりする。こちらのコーピングスタイルを相手の話の中に持ち込まない。2人組でワークをする意味がここにある。

## まとめ

### 1. 瀧野先生より

#### (1) 被災地での研修を通して～保育所の有する課題～

今月、宮城県宮古市で研修を行い、保育園の関係の先生方が多く参加した。研修の中で、園長先生方から「こんなにぎっくばらんに園長同士で話ができるようになったのは最近のこと」という発言がきかれ、「大変さ」を肌で感じた。園長先生同士でも、今年の5月くらいまで話をし合うことができない状態

だったのである。ただ、やっと話ができるようになった1年半が経過した今でも、遠慮されながらではある。

先生方の異動がある小・中学校と比較し、保育所の先生方は基本的に異動がない。また、地元在住の方がほとんどである。子どもと一緒に園と仮設を行き来する生活である。このような背景から、職員に対するストレスマネジメントに関心を持つ園長先生が多かった。

さらに、特に保育所においては子どもの背景にある家庭とのつながりに関して課題を抱えている。例えば、お盆の期間にあずかる子どもたちに家庭の雰囲気を感じてもらえるよう、家庭に対してお弁当の持参をお願いするなどの試みをしている。大変な状況におかれた家庭の抱える問題に対して、保育所が対応を迫られている。全国的にも、保育所の先生方にはお盆休みもない現状であるが、被災地ではそれに $+\alpha$ で、被災で大変な状況におかれている子どもたちの家庭の状況を加味しながら保育をしなければならない。保育所の先生の負担は大きい。

学校教育へのサポートと共に、就学前の子どもたちを預かる保育所等への支援は大きな課題であろう。

## (2)「東日本大震災 子ども・学校支援チーム」会議に対して

今後も、長く続ける支援を考えていくことが必要である。そこには、予算面の確保の問題も含まれるだろう。今後も、できるだけ本会議のような情報共有と情報交換の機会を設け、アイデアを出し合っていくことが大切であると感じている。

## 2. 大野先生より

### (1) 岩手県の悉皆調査について

岩手県の悉皆調査についてわかっていることは、第1に公表した範囲は新聞で発表したものとどまる点、第2に、データの扱いに関しては非常に過敏になっている点である。

### (2) 復興教育支援事業に係る被災地訪問からの報告

岩手県陸前高田市と大槌町を最近訪問した結果分かったことは、今一番必要だと考えられていることに関してである。それは第1に、居場所づくり、第2に夢を与える機能であった。これらが失われている現在、学校長の願いは教職員に対しては、「十分に休ませること」であった。具体的には、20日間の年休を全て使うように促していた。さらに、子どもたちに対しては、「自由にのびのびと身体をうごかすこと」であった。具体的には、自由に遊べる運動場が仮設住宅で占められてしまっているために、週に一回、やや遠方にある運動場に子どもたちを連れて行っていた。そこでも、先生方の負担を減じるために、先生方はその運動場から直帰の方針であった。

最後に、今回の訪問では、これまで挙げられてこなかった意見が先生方から挙げられた。第1に、「スクールカウンセラー等に依存することへの不安」である。具体的には、外部からきた支援者は、いずれ学校からいなくなるため、その時、学校の教育力が低下するような事態になるのではないか？との懸念が挙げられた。第2に、「ニーズを問われることに対する負担」である。具体的には、ニーズに合わせた支援が重要視されている中で、多忙な中、被災地の当事者の先生方がニーズを外部支援者に提示することは負担となっていることが挙げられた。したがって、支援を行うにあたっては、先生方にニーズを問うことから始めるのではなく、まず外部から来た支援者自らが「何ができるのか」を提供すべきなのである。具体的には、明日の学会シンポジウムで報告を行う。

## 3. 石隈先生より

## (1) 被災地各県からの報告を踏まえ

(※各報告の要点が簡潔にまとめられた)

## (2) ISPA の大会について

7月にカナダのモントリオールで開催された(※支援チームからは石隈先生と西山先生が参加した)。アメリカと日本のコンサルテーションについての発表もなされた。

### 《巻末：資料名一覧》

資料 1: 「第5回 東日本大震災 子ども・学校支援チーム会議」議事録

資料 2: 「第6回 東日本大震災 子ども・学校支援チーム会議」議事録

資料 3: 「子どものためのワークショップの支援活動」(表1)

「2012 中津山第1小学校・第2小学校・仮設住宅の児童対象の様子」

(西野先生より) ※回覧資料として

資料 4: 「さくらさぼーと 東日本大震災—被災地の学校・子どもたち—現地からのレポート」

(小澤先生より)

資料 5: 「研修報告：欧州学校心理学研修センター主催 学校における危機管理 基礎コース」

「The Community Stress Prevention Center : The Integrative Model Basic PH」

(西山先生より)

※巻末資料一覧に関してはPDF保存にしてあります。著作権等の関係で配付あるいは配信できないものも一部あるものと思われませんが、被災地には最大限の情報提供をいたします。